

IVORY AND BLUES

STEFANO JEFF BLUES



IVORY AND BLUES

STEFANO JEFF BLUES

アルバム・コンセプト



Born from the blues. Lifted by gospel.

コンセプト

Ivory and Blues は、一見対立しながら深く結びついた二つのカーブスとゴスベルを対話させる音楽の旅である。

一方にあるのはブルース。大地と夜と傷の声であり、苦難、疑い、孤独、そして人間の粘り強さの言語である。もう一方にあるのはゴスベル。光と希望と救いをもたらす、信仰と共同体、そして倒れるたびに立ち上がる力の響きである。

この二つの世界の間に立つのがピアノ、この物語の真の語り手である。繊細に囁くこともあれば、力と熱を伴って爆発することもある。その鍵盤は痛みと希望、記憶と再生が出会う場所となる。

ピアノのソロは親密な告白の重みを帯び、ゴスベルの声は個人のまなざしを共同的で霊的な次元へと広げていく。どの曲も、影と光、失意と信頼、転落と高まりを横断する人間の道程の一段階である。

Ivory and Blues は単なるアルバムではない。魂の旅である。ピアノと声と感情によって語られる、大地と空との絶え間ない対話である。

音楽的アイデンティティ

音の輪郭は *Ivory and Blues* 伝統的なブルースの最も本質的な根から生まれ、より広く、映画的で霊的な方向へと展開していく。

ブルースの語法が作品全体の土台をなしている。和声の進行、表情豊かなフレージング、そして感情の強度が、人間の経験の脆さと強さを語る。どの一音にも、記憶と敗北、そして完全には捨てられなかった希望の重みが宿っている。

その土台にゴスベルの輝く力が接ぎ木される。合唱は音楽的な役割だけを担うのではない。ひとつの存在、ひとつの共同体、そしてアルバムの物語の途上に現れる問いへの応答である。ブルースが個を語るところで、ゴスベルは結びつきを語る。ブルースが問うところで、ゴスベルは励ます。

すべての中心にあるのはピアノである。アルバム名に響く鍵盤の象牙は、二つの世界をつなぐ象徴となる。ソロは最も内省的な思索から感情の爆発へと移り、まさしく内なる会話へと変わっていく。

即興は本質的な役割を果たす。どの楽器のパッセージも、現実で直接的な感情を語りたいという願いから生まれる。作られたものは何もない。音楽は呼吸し、育ち、感情の流れに従って姿を変える。

このアルバムは強い映画的感觉も併せ持つ。ダイナミクスは絶えず広がり縮み、親密で瞑想的な瞬間と、より力強い合唱的な場面が交互に現れる。聴き手はさまざまな感情の風景を通り抜けていく。まるで一曲ごとが大きな物語の一場面であるかのように。



鍵盤の象牙 — 出会いの場所

全体の空気はあえて温かく、アナログ的である。響きは人の手触り、近さ、そして偽りのなさを求める。どの楽器も自らの個性を保ち、生きていて深く、迎え入れるような音の場をつくり出す。

こうして生まれたのは、アフリカ系アメリカの伝統の根を見つめながら、現代的で情感豊かな普遍の物語を手放さない音楽である。

テーマ

苦難のあとの希望

個人の変容

信仰と忍耐

人と人のつながり

意味の探求

闘いの末に得る喜び



STEFANO JEFF BLUES

アーティスト・ステートメント

“The blues taught me how to feel. Gospel taught me how to rise. This album lives between those two truths.”

STEFANO JEFF BLUES

物語の弧



ACT I

The Blues



ACT II

The Awakening



ACT III

The Grace

アルバムは三つの幕からなる旅として展開する。

第一幕を支配するのはブルース。夜、葛藤、疑い、そして進む方向の模索である。第二幕では内なる目覚めが現れる。希望が地平線に姿を見せ、人は自分より大きな力を認め始める。第三幕に訪れるのは恵み。痛みを消し去るのではなく、それを変容させるものとして。

作品全体が語るのは、大地と苦しみと暗闇の象徴であるブルースと、光と希望と霊的な高まりの象徴であるゴスペルとの出会いである。

TRACKLIST

★ ACT I — THE BLUES

01 Crossroads of Faith

信仰と疑いの分かれ道で、魂は進む方向を探す。夜はあらゆる確かさを試していく。

02 Dust and Glory

埃と砕けた夢のなかに、傷を負いながら歩き続ける者の尊厳が浮かび上がる。

03 Facing the Devil

自らの影の目をのぞき込む。内なる戦いはもう避けられない。

04 Hot Butter Groove

温かく身体的なグルーブが夜に火を灯し、緊張と疲れを純粋な動きへと変える。

05 Last Breath of Life

すべてを失ったと思えるとき、最後の一息が諦めと希望を分ける細い境界となる。

06 Skyline Shuffle

灯のともる街の地平の下、ブルースは見えない明日へ向かう不確かな歩みに寄り添う。

07 Soul on Fire

燃える魂が渴望と怒りと情熱に焼かれ、自らの灰のなかに救いを探す。

08 Together in Hell

二つの魂が同じ地獄を分かち合い、痛みの中に断ち切れない絆を見つける。

★ ACT II — THE AWAKENING

01 Between Heaven and Earth

かつてあったものと、これからなりうるものの間で、心は大地と空の間の居場所を探す。

02 Carry Me Home

力が尽きるとき、内なる声が家への道、そして安らぎへの道を示す。

03 Carry Me Through

最も苦しい瞬間、希望は一步ごとに寄り添う見えない手となる。

04 One More Mile

終着点は遠く見える。それでも決意は、もう一マイル進む力を見つけ出す。

05 Over the Hangover

過ちと幻を背後に置き、新しいまなざしでやり直す意志が生まれる。

06 River of Mercy

すべてを清める川のように、憐れみが過去の重さを溶かしていく。

07 Semicolon

物語はここで終わらない。休止のあと、人生は新しい意味を帯びて語り続ける。

08 Starlight Jam Session

星に満ちた空の下、音楽は出会いとなり、自由となり、分かち合いとなる。

09 Talkin' Bass

言葉は楽器たちの対話に場を譲る。そこではどの音も、より深い真実を語る。

★ ACT III — THE GRACE

01 Blessed Dawn

朝の最初の光が夜の影を溶かす。感謝と静けさのあいだに、新しい始まりが形をとる。

02 Blue Velvet Groove

ブルースは消えていない。気品ある手触りへ、温かく、深い自覚に満ちたものへと変わったのだ。

03 Grace after Midnight

最も長い夜のあとに恵みが訪れる。かつて恐れと不安が住んでいた場所に、安らぎが場を得る。

04 Homecoming

旅は自らの根へ帰ることで終わる。愛と記憶と和解に迎えられながら。

05 Sunday Fire

ゴスペルの熱が心に火を灯す。信仰と喜び、取り戻した自由とともに祝う祭りのように。

06 The Gospel Wind Is Blowin'

希望の風がすべてを吹き抜け、刷新と信頼、そして未来への新しいまなざしを運ぶ。

07 The Peanut Butter Breakdown

軽やかで遊び心のある一瞬。喜びは最も素朴なものからも生まれることを思い出させる。

08 Walking in Grace

道は続く。けれど今は一歩ごとが、恵みと信頼と内なる平安に照らされている。



どの音にも物語が宿る。どの声にも希望が宿る。

次のアイデアで、また。

Stefano Jeff Blues

